

熊取町埋蔵文化財調査報告第8集

# 東円寺跡発掘調査概要・IV

—東円寺跡88年—4区の調査—

1989年 3月

熊取町教育委員会

## は　し　が　き

東円寺跡は住吉川・大井出川の右岸の段丘上に位置し、その遺跡の範囲は熊取町役場を中心に東西約900m、南北400mの広がりをもちます。

昭和52年に大阪府文化財分布図にその範囲が掲載されてからは、数次の発掘調査が実施され、着々とその実像が明らかにされつつあります。

今回の調査では野田・五門地区での中世の水利について新しい知見を得る機会に恵まれました。

今後さらに東円寺跡での調査が進捗するに伴い、熊取町の歴史を明らかにしていくものと思います。

なお現地での調査及び本書の作成にあたってご尽力、ご協力をいただきました方々、並びに関係者各位に対し、深く感謝の意を表します。また、今後の調査にご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成元年3月

熊取町教育委員会

教育長　山　中　長　正

## 例　　言

1. 本書は、熊取町教育委員会が、受託事業として昭和63年度に実施した東円寺跡の調査概要報告書である。
2. 調査は、熊取町教育委員会発掘調査嘱託員井田匡を担当者として、昭和63年9月1日に着手し、昭和63年9月26日終了した。
3. 調査に要した費用は、阪上商事有限会社の負担によるものである。
4. 調査の実施と整理にあたっては、幸前和裕、櫻元勝人、井手口大作、池部吉也、富村伊都子、安福佳代、安田律子の諸氏の参加を得たほか玉谷哲氏のご教示を得た。また、阪上商事有限会社・株式会社西尾組・株式会社山下建築設計事務所・竹口文化財土木工業所並びに関係各位より多大な協力を得た。明記して感謝の意を表したい。
4. 本書中の標高は、東京湾平均海水面を基準とし、方位は、地図以外は磁北を示すものとした。
5. 本書の執筆及び編集は、井田がおこなった。
6. 調査にあたっては、写真・実測図等の記録を作成するとともにカラースライドを作成した。広く利用されることを望む。

## 目 次

第 1 章	沿 革	
第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	位置と環境	1
第 3 節	地区の名称および遺構の呼称について	2
第 2 章	調査の成果	
第 1 節	遺跡の概要	3
第 2 節	遺構と遺物	3
第 3 節	出土 遺 物	5
第 4 節	ま と め	6

## 図 版 目 次

図版第一	遺構検出状況
図版第二	遺構検出状況
図版第三	遺構検出状況 (S R - 1 • S D - 1)
図版第四	遺構検出状況 (木片出土状況)

## 挿 図 目 次

第 1 図	熊取町の位置	1
第 2 図	調査地位置図	2
第 3 図	調査地地区割り図	3
第 4 図	調査地平面図	4
第 5 図	遺物実測図	5
第 6 図	調査地周辺の小字名図	9~10

# 東円寺跡発掘調査概要・IV

## 第1章 沿革

### 第1節 調査に至る経過

熊取町大字五門1133番地において、阪上建治氏が給油所の建築を計画し、昭和63年2月29日付で文化庁へ土木工事に伴う埋蔵文化財の発掘届出書を提出し、熊取町教育委員会には埋蔵文化財包蔵地の存在確認調査に伴う技師派遣依頼が提出された。

これを受けて、熊取町教育委員会では同年4月2日に機械により試掘調査を実施し、遺構及び遺物包含層を確認した。これに基づいて遺跡の取り扱いについて、熊取町教育委員会は阪上建治氏と協議を重ね、給油タンクの設置工事と擁壁工事の実施によって、破壊される恐れのある箇所及び遺構を確認した箇所について、遺跡の重要性に鑑み調査を実施することで合意した。

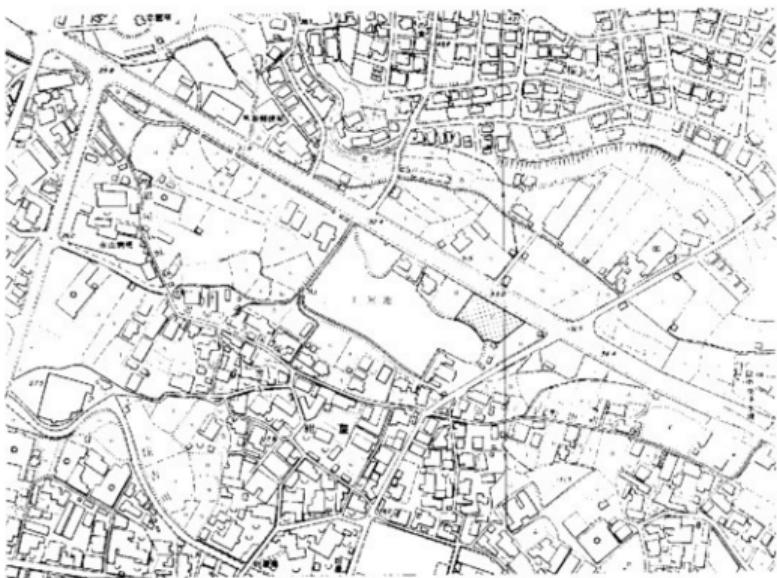
### 第2節 位置と環境

東円寺跡は、大阪府泉南郡熊取町大字野田に所在し、熊取町役場及び公民館周辺に位置している。付近の地形は埋積谷と段丘面で構成されており、標高は海拔32mから40mを測る。

東円寺跡は、昭和52年発行の大坂府文化財分布図にその位置と範囲が初めて掲載されているが、遺跡となつたのは範囲内で古瓦などの遺物が多量に散布していることと、寺に関係する小字名と考えられる大門・どぶ池（堂の池）・豊寺・東曜寺・東円寺・堂の後



第1図 熊取町の位置



第2図 調査地位置図

などの小字名を持つ水田が、一ヵ所に集中し存在することから遺跡として取り扱われることとなつた。<sup>(1)</sup>

遺跡の範囲は、北は大原池、南は大井出川・住吉川・西は口無池、東は町立中央小学校東側の段丘までで、東西900m、南北400mの広がりを持つ、奈良時代から江戸時代にかけての寺院跡と集落遺跡である。

東円寺跡の存在する大井出川・住吉川流域には、他にも遺跡が多く存在しており、熊取町内では大浦中世墓地・口無池遺跡・紺屋遺跡・大久保B遺跡・大久保D遺跡が存在する。更に下流の泉佐野市域では、山出遺跡・檀波羅密寺・井原の里遺跡・湊遺跡などが存在する。大井出川・住吉川流域周辺では、新たに遺跡が発見される可能性は極めて高く、その位置と範囲の確定は今後の課題である。

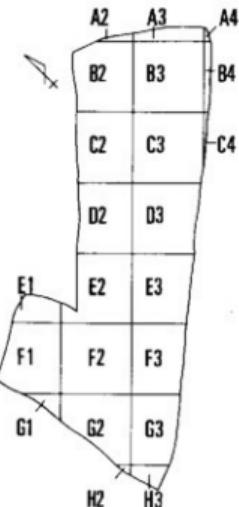
### 第3節 地区の名称と遺構の呼称について

調査地内では、5m四方の調査地区の地区割りを実施した。南北方向は、アルファベットによる地区名で呼称し、A・B・C・Dと表す事とした。東西方

向はアラビア数字による地区名で呼称し、1・2・3・4と表す事とする。

本書中でも遺構の位置等の表し方は、これに準じて、A 1、B 2と表す事とする。また、今回の調査地での南北の基準線は東へ45°ふっている。

更に、調査を実施する際に遺構については、検出した順に遺構の略称と番号を組み合わせて呼称することとした。略称は川を S R - 1、溝を S D - 1、柱穴を P i t、土壌を S Kと呼称したが、本書中でもこれに準じて S D - 1、S K - 1と呼称することとする。



第3図 調査地地区割り図

## 第2章 調査の成果

### 第1節 遺跡の概要

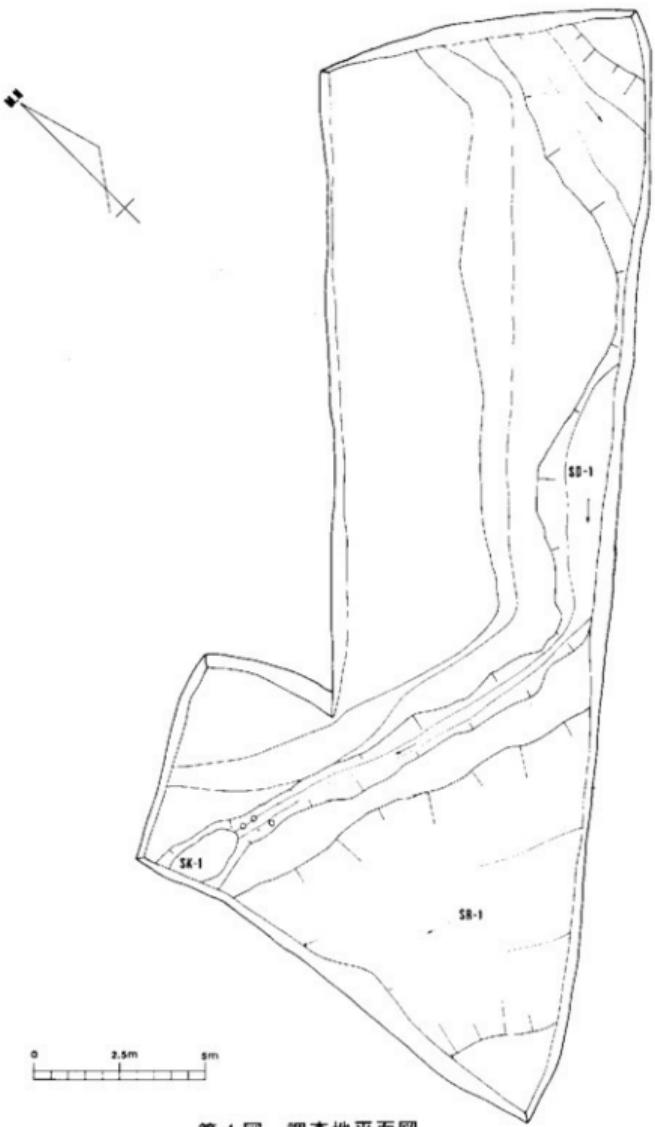
調査を実施した地点は、小字名では紺屋領池ノ上<sup>(2)</sup>と呼ばれる地点であり、遺跡範囲の西南端で口無池に接している。現状は水田で、地表面のレベルは東側の水田より、約50cm程低く、西側の水田より30cm高い。

検出した遺構としては、川が1条、溝が1条、柱穴が3基、土壌を1基検出した。遺物は総体的にみて少ない量で、主に12世紀から15世紀までの遺物が出土した。以下遺構及び遺物について述べることとする。

### 第2節 遺構と遺物

#### ① 川 S R - 1

S R - 1はF G 2・3で検出された川（自然流路）である。巾は7m前後を測り、深さは50cmを測る。遺構自体は自然に埋積したようである。隣接する



第4図 調査地平面図

口無池への流路と考えられる。

### ② SD - 1

SD - 1 は調査区を南北に流れる溝で、巾は 1.5 m を測る。深さは 1 m 前後を測る。埋土は紫灰色粘質土である。遺物は瓦器が少量出土した他に A 3 地点で木片が出土している。

### ③ SK - 1

SK - 1 は調査区 F 1 で検出した土壤で長軸は 2 m 以上を測り、短軸は 1.2 m を測る。埋土は紫灰色粘質土である。遺物は出土しなかったが遺構の埋土に少量の炭が混じる。

### ④ Pit

調査区 F 1 で柱穴を 3 基検出した。いずれのピットも直径 1.5 cm 前後を測り、深さも 20 cm 前後である。遺物は出土していない。

## 第 3 節 出土遺物

出土遺物は

いずれも破片

であった。1

は瓦器碗の底

部である。み

こみには格子

状の暗文がみ

うけられる。

2 は青磁の碗

の口縁部であ

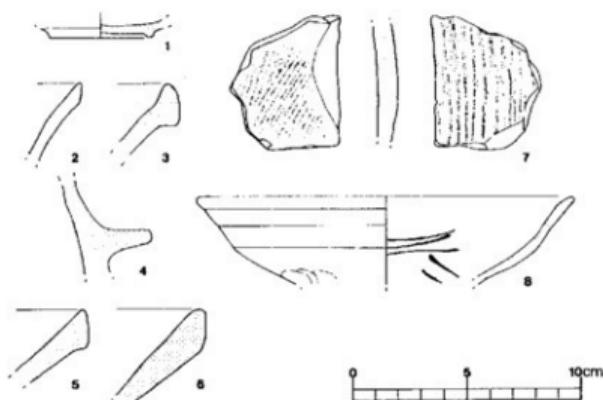
る。3・5・

は東播系こね

ばちの口縁部

である。

3 は口縁部



第 5 図 遺物実測図

がやや厚手である。5は全体的に厚手である。4は羽釜の羽根部と体部の一部を含む破片である。6は瓦質のこねばちである。7は瓦質の甕である。外面には一方への刷毛目がみられ内面には多方向への刷毛目がみうけられる。8は瓦器壇で内面には螺旋状の暗文がみうけられる。

#### 第4節 ま と め

本書では給油所の建築に伴う東円寺跡の調査について報告した。当該地での主な遺構としては、溝（SD-1）と川（SR-1）が検出されているが、これらの遺構は出土遺物から判断する限り、15世紀以前のもので、農耕の灌漑用水として存在していたと考えられる。またSD-1・SR-1については、隣接する口無池への流路であると思われ、周囲の地形から判断する限り、SD-1・SR-1に放水している溜池がさらに海拔の高い位置に存在すると考えられる。

口無池については、以下のとおり『和泉國熊取荘中家文書』の『九郎五郎田池売券』の中に『口無池向田』と呼ばれる小字名が記入されており、永正13年（1516年）の記述が見受けられる。<sup>(3)</sup> 中家文書で口無池の記述のあるものとしては一番古いものである。文書から見る限りは、16世紀初頭には既に口無池は存在しており、中家文書の中には口無池周辺の小字名の記述があるものだけで、天文年間までで10通余りある。<sup>(4)</sup>

『九郎五郎田地売券』<sup>(3)</sup>

「九郎五郎ヨリ」

賣渡申地之事

合一所 南限池ノツヽミヲ

西限下ノ一色ヲ

四 至

東類地限

北限同一色ヲ

在向井田くちなし池尻ニ之

中 略

永正十三年十一月十日

九郎五郎

中左近殿へ參

今回の調査では、近世以前の水路について窺い知る機会を得た。調査面積の制約や遺物などの資料が希少であるため、結論については、時期尚早であるので避けるが、今後も周辺での調査を実施し、調査結果の蓄積を待って何らかの形で報告を行い、その責を果たしたい。

文末となつたが、調査を実施していく上で数多くの方々よりご教示、ご支援いただいたことを深く感謝し、今後も東円寺跡について調査・保存・活用について十分な配慮を関係各位にお願いしておわりとしたい。

注 (1) 『熊取町の歴史』熊取町教育委員会（1982）

(2) 本書第7図口無池周辺小字名図参照

(3) 『和泉国熊取荘中家文書』より転写

(4) 町史編さん室嘱託 玉谷 哲氏のご教示を得た。



### 第6図 調査地周辺小字名図

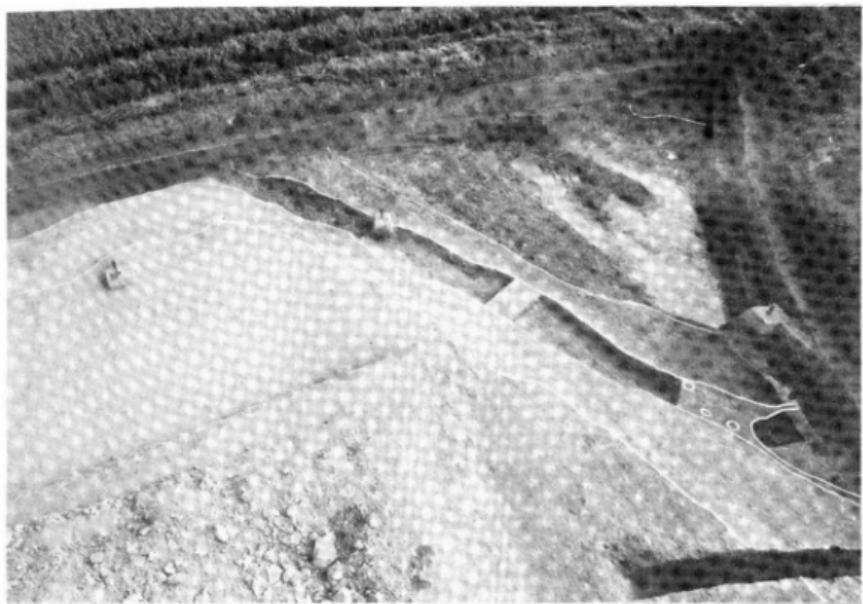
# 図 版



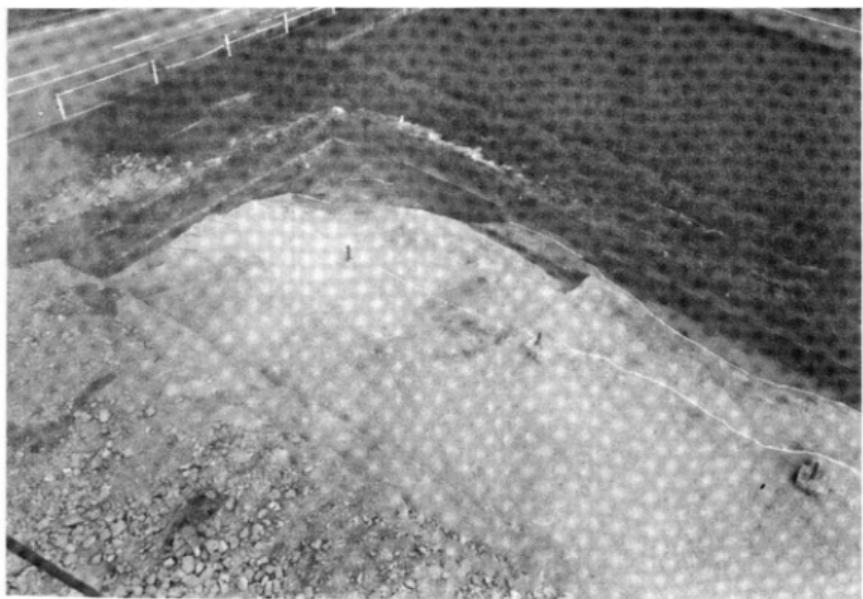
（北から）



（西から）



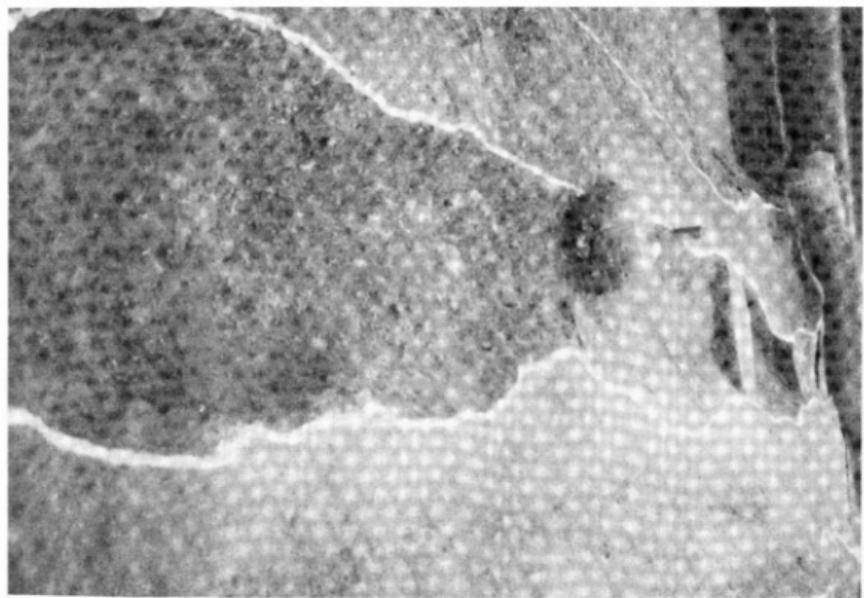
(北から)



(南西から)



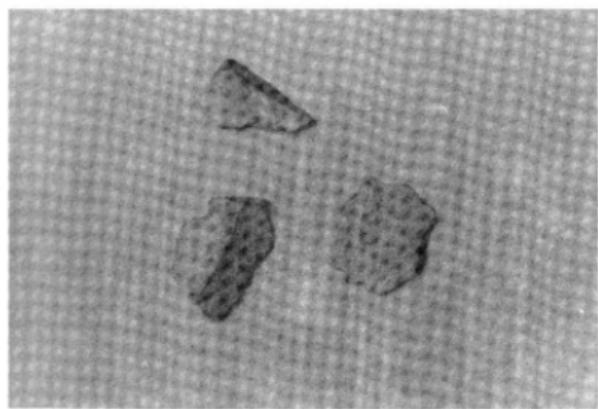
SR-1、SD-1 南から



SD-1（東から）



SD-1 木片出土状況



SD-1 出土 サスカイト片